
リリカルなのはA's to StrikerS 未完成な少女達

南 透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはA's to Strikers 未完成な少女達

【Nコード】

N5262P

【作者名】

南 透

【あらすじ】

一人の少女が見つけた紅玉、これが全ての始まりだったのだ。紅玉から現れた神獣と呼ばれる存在。カーバンクルは自分を見つけてくれた少女に願う「お願い……色を集めて……」と、海鳴市とヴァナディールを舞台にした中学生魔法少女の物語。 始まります。

リリカルなのはの二次創作です。他にFFXIの要素が加わります。

プロローグ

新暦71年 春 ミッドチルダ空港大火災が発生していた同時刻。
聖王教会が所有する騎士団にも動きがあった。

聖王教会筆頭騎士。カリムの執務室ではカリム・グラシアが厳しい顔で空間に浮かぶ数々のディスプレイを見つめている。

「シャツハ。どのような形でもいい、必ず生かして捕らえなさい」

空間ディスプレイの一つにはカリム専属のシスターシャツハが映っている。

普段の落ち着いた修道女姿ではなくヴィンデルシャフトを起動させたシャツハのもう一つの姿である修道騎士姿だ。

聖王教会が所有する騎士団は時空管理局のそれと違い教会が独自に運営する団体であり、教会に無関係な事柄に動くという事はない。

今回は数年前にカリムが予言した内容が形となって現れ始めた事による騎士団の出動である。

現在はミッドチルダに本拠を置く窃盗団の足取りを掴み。ある物の確保と窃盗指示を出した人物の洗い出しのために動いていた。

その動きの最中に偶然にもシャツハと騎士団員数名が窃盗団の数人と遭遇し追っている所であった。

ディスプレイの中のシャツハがカリムに了承の意図を伝えるとディスプレイは閉じられる。

カリムは幾つもあるディスプレイの映像を見つめ。机に肘を突き右手の親指の爪を軽く噛む。空港大火災の映像もディスプレイには映っている。

「予言はくつがえせなかった……」

カリムの脳裏には予言の事柄に関連して、この大火災が起こったとしか考えられなかった。

大火災が続く空港。その外れにある埋め立て地の町で逃走劇が発生していた。逃げる方は蜘蛛の子散らすようにバラバラになり追う側をかく乱する。追う側は腕に荷物を抱えた人物に狙いをしばった。

「シスター！ この先で対象一名を補足。そちらに追い込みます！」

シャツハの頭の中に思念通話で男の声が届く。わかりましたと思念通話でかえし、ヴィンデルシャフトのカートリッジを2発ロードし魔法を使用する。

「はぁ！」

掛け声と共に彼女は建物の中に吸い込まれた。

空港大火災が発生しなければ本来は管理局に依頼をしている事柄であるが、現状では彼等騎士団が動かざるえなかった。

ベルカ式魔導師のみで編成された教会の武装隊。ベルカ式の優秀な魔導師は騎士と呼ばれるため彼等武装隊は騎士団と呼ばれる。

正式名称。聖王教会武装隊、幻影騎士団。ヴィジョンリッター。

シャツハ等の修道騎士や魔導騎士達が所属するのである。

大火災の為に無人となっている建物の中にはいる男。幻影騎士たちに追われる窃盗団のメンバーが大きな黒いケースを抱え逃げた。

大火災が発生したら依頼主のところに持つていく予定だったのだが騎士団との遭遇は彼にとって完全に予想外だった。

「くそ、相手は騎士団か……ブツがブツだけにむやみに俺の魔法は使えない」

窃盗団メンバーがこのままでは自分が不利だと考えていた矢先の事だった。壁から黄色い魔力光が発生して彼が抱える黒いケースを奪われてしまった。奪われた時にシャツハにシャフトでの一撃を入れられ吹き飛ばされる。

「なに！？ 壁から出てきただ！」

彼のケースを奪ったのはシャツハ・ヌエラ。彼女の使う魔法の一つ旋迅疾駆は物質通過跳躍効果がある。ケースを奪いヴィンデルシヤフトを構え彼女は男に対して警告をした。

「聖王教会、幻影騎士団です。窃盗の現行犯で貴方の身柄を拘束します！」

通常、騎士団には逮捕権はない。が、カリム・グラシアは管理局でも少将という位に居る。常に人手不足の管理局としては協力体制にある聖王教会においてはある程度の拘束権を認めている。とはい

え現行犯の場合に限ったりするのだが、今回は正にそれであつた。

シャツハにケースを奪われた男はこれはチャンスとみるや自身の魔法を使う為に懷から黒い球を出し地面に投げつける。黒い煙幕が立ち込めてシャツハの視界を遮る。

「へ！ 此処で捕まる訳にはいかんのさ、お前さんがケースを奪つてくれたおかげで俺にも魔法が使える機会が出来た、ここは逃げさせてもらつさ」

すこし遠くなった感じの男の声が聞こえる。シャツハも魔法を使う為に魔力を放出しようとするが、男が声を出す。

「いいのか？ 抱えたブツは魔力に敏感だぜ？ 暴発してもしらねえぞ？」

後に分かる事になるが、男が抱えていたのはレリックと呼称されるロストロギアであつた。封印を施さないと少しの衝撃でも暴発を起こす危険物質。

現在シャツハが持っているケースは簡易封印が施されているだけであり、転移魔法や空間砲撃等の大きな魔力干渉があれば確実に暴発をする。

ベル力式魔法をつかつたとしてもシャツハの様なタイプなら暴発という事は無いのだが。この時点でそれははまだ分かっていない。

「いま起こつてる大火災も、お前が持つてるそのケースの中身が原因だ。どんだけの物かわかるよな？」

男の発言を聞いた、ナンバー１１と刻印されたケースを持つ修道騎士は頬から冷や汗を流す。

シャツハの反応を見た男は空間転移の魔法を使用してその場から姿を消した。伊達に窃盗をしてる人物じゃない、逃走するために必要な魔法は持っているというところか。

僅かな時間で魔法を構築し、シャツハとの会話で彼女の意識をレリックに移した隙を狙っての魔法使用は敵ながら見事であった。

「逃げられた」

ケースを抱え、その場で立ち尽くすシャツハに思念通話が入る。

「シスター、セブンカラーが対象の転送先を掴んでいます、直ぐに追うそうです」

思念通話を聞いたシャツハの表情は流石ね、というものを作った。

「そうですか、なら此方は中身の封印を完了した後にセブンカラーの援護に回ります。美加なら取り逃がす事も無いでしょうが、他がね……やりすぎないかしら？」

シャツハはセブンカラーという騎士団コードを持つ人物の能力を心配していた。

町からやや離れた山の中腹の平地の草むらにミッド式魔法陣が出

現し中から男の姿が現れる。シャツハから逃げた男だ。
魔法陣が消えるとその場でしゃがみこんだ。

「へへ、逃げ切れた」

男に気が付かれる事無く男の姿を見つめる人物が一人、空に浮いていた。大火災が起きてる上空はかなりの気流の乱れがありその人物のセミロングの髪を揺らす。

藍色のセミロングの髪。サファイアの様な瞳。薄青のワンピーススタイルの騎士甲冑を纏い。杖というには些か大きなデバイス。両手棍といったほうがシックリと来るものを持っている。

聖王教会武装隊。幻影騎士団所属の修道騎士。ゆるぎみか 萬木美加15歳。
コードネーム。セブンカラーを持つ人物が彼女だった。

「対象を目視で確認……いこうか？ ニル」

<ok>

ニルと呼ばれた彼女のデバイスは男性様の声を出し、次にマスターである美加に質問をした。

<Which does the color use?>「色はどれを使うのだ？」

デバイスにしてはやや高圧的な喋りをするニル。正式名称はニルヴァーナ、彼の喋り方を気にしない美加は彼に色の指示を出した。

「そうだね、カリムさんから生かして捕らえなさいと言われてるか

ら、光でいこうかな」

<It has understood . > へ分かった」

彼女の足元に白色のベルカ式魔法陣が構築される。身体の前で大きな両手棍を起用にクルクルと回転させていくセブンカラー美加。

<Possession System Drive ignition
> へポゼッションシステム。ドライヴイグニッション」

ニルヴァーナの先端部分が光り出し、光が円を作ると美加に変化が現れる。

藍色から薄緑に変化し長さもセミロングからロングになる。ワンピースの騎士甲冑はサファイアの法衣姿^{ローブ}になり彼女の額に紅玉が出現した。

<Color of Light Carbuncle> へ属性色
光 カーバンクル召喚」

ニルヴァーナの回転を真横で止めた美加。回転で作られた光の輪が徐々集まり球となる。薄青の光を放つ球は美加の額の紅玉に入った。

「カーバンクル あとはよろしくね……」

美加が瞳を閉じ一言喋ると、まかせてという声が彼女の頭の中で響く。美加の体が一瞬ビクツと動き彼女が目を開くと瞳の色は紅く変色していた。

「あそこにいる男を捕まえればいいんだよね？」

美加の声は先ほどと変わり小さな男の子が発する感じに変わっている。彼女がいったカーバンクルと呼ばれた存在が発した声だ。

<Do not do too much Carbuncle>
「やりすぎるなよ、カーバンクル」

「まかせて！」

ニルヴァーナの心配を他所に、まかせてが口癖のカーバンクルは空中から一気に男のしゃがみ込む草むらに降下した。

男は空から飛来する人物に気がついた。両手棍を構え自分に対して襲ってきたのだ。ミッド式のプロテクションを作りその攻撃を受け止めた。

ニルヴァーナとプロテクションがぶつかりあい、派手に光が発生する。

男の瞳には紅い瞳の薄緑髪の少女が映っている。

「なんだ？ どこから沸いて出た」

今までは転移すれば振り切れた経験しかない窃盗団の男は今の状況が理解できていなかった。転移魔法というのはそういう物だからだ。

プロテクションを破壊すると一度攻撃の手をやすめて距離をとるカーバンクル。

「いまからお前を捕まえる。痛いけどなかないでね！」

カーバンクルは少年声を発して両手棍を男の前に片手で突き出した。空に浮かんでいた時と違いかなり好戦的な雰囲気を持っている。

ニルヴァーナが白く光りだし。両手根が形状を変化させ拳銃形になる。

<Mark sForm Start-up>「マークスフォームスタートアップ」

ニルの発声と共に銃口に白い光が集まりだし男に向けて放たれた。

「シリアリング ライト！」

銃口から打ち出された白い光の魔法は男に襲い掛かり直前で幾重にも伸びる鎖となった。

あまりの眩しさに片手で視界を覆っていた男は逃げる機会を失いカーバンクルが打ち出した魔法の鎖によって身体を拘束された。

「く……」

ギシギシと音をたてて鎖は男を締め上げる。

「時間が無いからさっさと決める……いっちゃいな！」

カーバンクルは額の紅玉を光らせシリアリングライトの効果を更にあげるとボキボキという音が聞こえてくる。

カーバンクルのシリアリングライトの拘束が強すぎたのか男の骨が折れた音だ、男は白目をむいてその場に倒れこんだ。

<Though do not do too much>「やりすぎるなど言っただがな」

「でも、つかまえたもん、問題はないよね！」

カーバンクルはニルヴァーナに言ったと同時に美加の体から抜け出た。薄青光の球となって拳銃型のニルヴァーナに吸い込まれる。

拳銃型から元の両手棍に戻ったデバイスはマスターに声を掛ける。

<Do you live though tentative
y captured? This fellow>「一応捕らえたが、生きてるか？ こいつ」

髪色も藍色になり瞳もサファイアに戻った美加が、大丈夫じゃない多分と自信なさげに言った時に空間ディスプレイが出現した。中に映ってるのはシスターシャツハだった。

「美加、窃盗団は捕らえられた？」

「はい……確保はしました……けど……」

対象を確保出来たか確認するシャツハに捕らえた映像を見せると、完全に白目をむいてる男がシャツハのディスプレイに映る。

骨を折られた両腕がありえない方向に向いていた、あまりに無残な男に同情する様にシャツハの表情が変わる。

「あの子をつかったのね……まあ結果オーライですね……これから火災の支援に回ります。貴女も来て下さい」

「分かりました」

美加はシャツハとの通信を終えて足元に四角系の魔法陣を構築した。先ほど捕らえた男と同種の転移魔法を使いその場から姿を消す。

この後、幻影騎士団は大火災の支援活動に行動をシフトしていく。

新暦71年の空港大火災は管理局と影ながら協力をした幻影騎士団の活躍もあり。死者0という結果をこのして鎮火した。

この物語は、幻影騎士団の修道騎士。萬木美加の中学時代のエピソードを語るものである。

リリカルなのはA・s・t・o・S・t・r・i・k・e・r・s 未完成な少女達

プロローグEND

プロローグ（後書き）

南 透です、ここまで読んで下さり有難う御座います。

あらすじと違うじゃねーか！ と思われた方もいらっしゃると思います。

一話からあらすじに添いますのでご勘弁を。

此方での投稿は初めてですので、どうかよろしくお願いします。

第一話（前書き）

前書きの欄で登場人物の紹介なんかを書き出しておきます。

萬木美加 へゆるぎ みか

清祥学園中等部 二年E組 時空管理局預かりの魔導師。

言霊を魔法効果変換という形で実行する事が可能な新しいスタイルを持つ。

使用デバイスはニルヴァーナという名称をもつ両手棍。

藍色セミロングの髪とサファイアの様な瞳をもつ女の子。

星神すずめ へほしかみ すずめ

清祥学園中等部 二年E組 時空管理局囑託魔導師。

使用術式 ミッドチルダ式 魔力ランクAA 空戦型の万能タイプ。

クロノと同じタイプの魔法を使用する。

極度の漫画オタク（ジャンルを問わない）であり、自他共に認める魔法腐女子。

普段はおちゃらけているが、友達を大切にしたいは誰よりも強い。
注：星神すずめは作者の考えたオリジナルキャラではありません。
二次創作作家の知り合いである梅さんからキャラのみをお借りしています。

第一話

新暦70年 6月21日深夜。

海鳴市の臨海公園。防波堤にうち付ける波は高かった。

20日の夜の天気予報では降水確立60%という数値が発表されていた。

街燈に照らし出された臨海公園の白い歩道にある空き缶が、風を感じてゆっくりと回り始め移動を開始する。風は玩具を見つけた子供の様に遊び始める。

空き缶は風に遊ばれ歩道を全力疾走し始める。単調な動きしかない空き缶。風は玩具に飽きたのか空き缶を投げ飛ばした。

空き缶は歩道に一度打ち付けられ。かん高い音を出し空中に高く舞った。

海の沖合いが見えるまで舞った空き缶はその海に落下する。

風が強くなりなり始めた海上は波があわただしく揺れ始め臨海公園の白い歩道にはポツポツと黒い点が出来始める。黒い点は急速に広がり始め白い歩道を直ぐに黒く染めていった。

予報どおりに雨が降り始めたのだ。しかも風を伴い嵐に近い感じでの急速な豪雨。歩道には大量の水が溜まって行き路面を大きな鏡と変化させていった。

黒く染まった大きな鏡面には一筋の光が映る。光は海の沖合いの方から出ていた。

天から降り注ぐ一筋の光は雨雲を突き破り海に入った。時間にして約5秒位であろうかビーム砲の様に天から海に伸びたソレは全てを海に飲み込ませる。

辺りは直ぐに暗くなり何事も無かったかのように風雨の激しいダンスが続いていった。

その日の朝。いまだ雨は振り続ける海鳴市の藤見町に一つの道場がある。星神合気道道場の看板を掲げる建物は大きく、多人数が同時に稽古をつけられる作りになっている。

外観は何処かの空手道場のような近代的な施設ではなく、生活するための家屋と一緒に造りになっていた。とはいえ母屋と道場の距離は結構離れているのだが。

さらに特筆すべきは、ガス・電気があるのに。いまだに台所と思われる場所からは煙突が突き出ていた。

木で作られた雨戸には先ほどから雨が音を立てて叩き続け年季のはいった木造建築物に容赦なく攻撃をしている。

カタカタと鳴る雨戸はその攻撃に負けまいとしている感じであった。いわば、一昔前の木造りである。これはかなり古風だ。

現在はAM6:30。先ほど見た台所の煙突からは煙が立ち昇っている。古いとはいえ流石にカマドを使っている訳ではないだろう。証拠に換気扇の音は聞こえてくる。

その排気口が煙突につながっているというだけか。

台所から聞こえる包丁を使う音がリズムよく聞こえる。ついでに使っている者の鼻歌も聞こえてきている。

台所で包丁を使っているのは清祥学園中等部の制服を着た女の子。緑の長い髪を結って朝食の準備とお弁当であろうか？　そのオカズ作りをしている。

大根をきり終わると湯を沸かしていた大鍋に大胆に全部いれ煮込む。出汁を加え更に煮込む、その間に玉子焼きなんかを手早く作りお弁当ケースに詰め込んでいく。

野菜と玉子焼きそれに今朝のオカズである鮭の切り身を焼いたものを詰めオカズは完成する。少女は炊いたご飯を残りのスペースにつめ。海苔をかぶせる、更にご飯をのせまた海苔をかぶせる本日のお弁当、二段海苔弁の完成だ。

オタマで味噌をすくうとさっきの大鍋に豪快に放り込む。

「ふふふん」

ここまで順調に朝食を作りおえて味噌汁の味見をした。おたまから直接味噌汁を啜る。

これまた豪快に啜り。ゴクンと一回ノドを鳴らして味を見る。真剣に味を見ているのか両目を瞑っている。

「んっバッチグー！」

大鍋に対し今朝の味は最高だぜ！　という様に左手を突き出し親

指をつきたてた。左の目だけを開けた女の子の瞳は黒く。中心部に僅かであるが金色の点が光りが灯っていた。

会心の出来栄えの味噌汁（大鍋）の完成に彼女、星神すずめは喜んだ。そして家に住むもう一人の家族を呼ぶのであった。

「じいちゃん！ 御飯できたよ〜！」

清祥学園中等部2年E組、星神^{ほしかみ}すずめ14歳。祖父である星神政信との二人暮らしであった。彼女が結ってあった髪留めを外すと綺麗な緑髪は腰辺りまで伸びた。

すずめの大声が星神道場の中央にまで聞こえる。道場の真ん中では胴着を着けた老人が正座で精神統一を図っていた。

雨戸で締め切られた道場は暗い。その中での精神統一は政信の日課であった。既に白髪の短い髪であるが。均整の取れた身体は今尚彼が、現役の武術使いという事を物語る。

すずめに言わせると、濃いゲジゲジ眉毛がチャームポイントのじいちゃんらしい。町の子供達に合気道を教え日々の生活を送っている。精神統一を終えたのか彼の両目が開けられるとすずめと同じく黒い瞳のなかにも僅かに金色の光が宿っていた。

日課を終えると立ち上がり台所に急ぐ政信であった、星神家では台所で食事を済ます。政信がテレビを見ながら食事するのを嫌うからだった。

いただきますを済ませてから二人して向かい合い朝食を取る。本日の星神家の朝食は、鮭の切り身の塩焼き、厚焼き玉子。大根の味噌汁に納豆。胡瓜の糠漬けだった。黙々と二人で食べる。

「あ、じいちゃん。今日は、なのはちゃん達と出かける所あるからさ。帰りは遅くなるね」

取ってきた朝刊を祖父にわたし放課後の予定をつたえるすずめ。実は彼女は時空管理局の嘱託魔導師である。だが祖父にはそれを伝えて無い。

小学6年の時に、海鳴の祖父の所に来たのであるがその時に魔法という存在に出会ったのだ。

本人曰く、世話になってる爺ちゃんに余計な心配をさせたくない。そういう思いから中学二年の現在でもその部分は伏せていた。

嘱託の仕事がある時は同じ魔導師である友人、なのはやフェイト、はやてをだしにして帰りが遅くなると伝えていた。

「高町さんやハラウンさん、八神君に、ご迷惑かけてるんじゃないのか？」

事情を知らない政信は、孫がまた暴走しないかヒヤヒヤだった。なにせずめはメイド服のコスプレ等を自分だけではなく友人にも強要する癖がある。政信には理解が出来ないが孫に言わせると。

萌えが無くては 生きられない！ と、豪語された経験がある。萌えの為には何でも行動を起こす。それが星神すずめ14歳、バストCカップの思考であった。

「じいちゃん。私だって常に萌えてる訳じゃないよ？ 女の子には女の子の付き合いって奴があるのだよ」

食事をし終え、食器を片す時。立ち上がり、ご自慢のCカップを突き出し政信の考えを否定した。すこし揺れる胸。私に萌えなさい。そんな態度だ。

祖父になんて態度をとるんだ……と政信はおもったが孫の奇行は今に始まった事じゃない。新聞に目をおとして言った。

「まあいい。味噌汁作ってあれば文句は言わん。あまり遅くなるなよ」

すずめが食事を作れない時は、ねこまんまと沢庵で食事をすます政信なのだ。すずめが大鍋で味噌汁を作っていたのはこの為だった。

もちろん、ちゃんと作ってあるよ！ という態度を取ったバストCカップの星神すずめだった。

朝食も済ませ彼女は自室に外出着を取りに向かう、彼女の部屋には所狭しと本棚が設置されてある。中身が純文学のような活字ものなら文学少女なのだろうがそうではない。

中身は漫画だった。

星神すずめは、極度の漫画オタクなのだ。ジャンルを問わない彼女のオタク度は自室だけでは収まりきらず、別室に書斎と称される漫画倉庫を持っている。

玄関にて靴を履き、傘と鞆を持つと。奥でまだ新聞を読んでいるであろう祖父に声をだした。

「いつてくるね、じいちゃん！」

リリカルなのはA・s to Strikers 未完成な少女達

時空管理局アースラスタッフ待機室では、高町なのは、八神はやて、フェイト・T・ハラOWNがそれぞれの管理局制服姿で応接室で待機していた。

管理局に入局して早5年。各々の進路も少しづつではあるがはっきりしてきていた。

なのはは戦技教導隊に入り、はやては特別捜査官。フェイトに至っては2回ほど落ちた執務官試験に晴れて合格し執務官となっていた。

三人とも自分の夢の為に全力を向けている。最近は三人一緒に同じ仕事をする機会は減ってきている。

リンディが艦長を退き。フェイトの義理の兄であるクロノが艦長になってから、アースラに三人そろって集合というのは久しぶりの事であった。

クロノが少し遅れるらしいので三人は応接室で話し込んでいた。

女三人寄れば姦しいという言葉がある。学校帰りで管理局に来たというのも大きいと思うが、一般女子中学生が会話するような、服装の話や、可愛いプリクラが何処にあるのかとか他愛のない会話に華を開かせていた。

クロノがこの場にいたら、眉間にシワを寄せてうるさい、と言う事であろう。

職業魔導師といえど彼女達はまだ中学生だ、歳相応な会話という

のもする。そんな中フェイトの口から新しい魔導師という言葉が出た。

なのはとはやて。二人の反応がこの言葉。

「え？ 新しい魔導師？」

フェイトが言った新しい魔導師というのは単に新しく配属されるという意味ではない。今までに居なかったスタイルの魔導師という意味だった。

「うん、何でも言葉そのものに意味を持たせて効果を出すとか言ったタイプみたいだよ」

「それって呪文って意味とちゃうんか？」

はやての疑問ももつともだ、彼女達三人も魔導師である限り魔法というものが何なのか心得ている。管理局が推奨する比較的クリーンなエネルギー運用技術。

彼女達魔導師の体内にあるリンカーコアで生成される魔力を使用して、呪文という形かデバイスという魔導端末をつかって予め組み込んだ魔法効果を發揮させるという物。

フェイトの口から出た言葉という単語に呪文を連想してもおかしくは無い。だが執務官であるフェイトは首を横に振った。

「ううん、そうじゃないんだ」

フェイトは右手の人指し指を自分の口にもってゆき新魔導師スタイルの説明をする。

「例えばこの口から発した言葉がそのまま魔法となって効果が現れるの」

なのはとはやては頭の上に疑問符を並べる。フェイトの言った事はつまり呪文を唱えて効果を出す。それに代わりが無い気がする。何処が新しいスタイルなんだろうと。

「ごめん、私じゃ。今までのスタイルと同じとしてしか理解ができないかな」

親友のフェイトにまず謝り、フェイトの言った事が理解できないと正直にいうのは。

「わからないか……私の説明じゃ足りないのかな……」

「ぜんぜんだよ、フェイトちゃん」

フェイトの『足りない』という言葉に肯定意見を出したのは。なのはでもなく、はやてでもなかった。三人が声のした方向をみる。

腰の辺りまで伸びた緑の長い髪と弓道で使う胴着を着用した少女が、腕を組んで入り口に突っ立っている。

時空管理局嘱託魔導師。星神すずめのバリアジャケットは武道の胴着を模したものであった。少し違うのは胸にあたる部分にプロテクターが付いてる所か。

いままでこの場に居なかったのはクロノから魔法運用の確認をするための模擬戦試験をつけていた為である。

すずめのバリジャケットの所々には黒く変色してる部分があり焦っていた。

「フェイトちゃんの言い方は遠まわしすぎるんだよ……おふう」

すずめは言った後その場で盛大に頭から倒れこんだ。良く見ると背中から煙を出していた。

「最後のブレイズキャノンが今になって効いたのか……やせ我慢にも程があるなコイツは」

煙を出して倒れこんだすずめに呆れた声をだしたのは、黒いバリジャケットを着込んだクロノ・ハラオウンだった。倒れたすずめの後に居たのであろう。

「兄弟子様、妹弟子に遠慮なく止めを刺すという行為は……あまり褒められるモノではなくってよ……」

床に顔を密着させたまま文句をいうすずめに対しそこまで口がきけるなら手加減も上手くできたな、という感じのクロノ。妹弟子は放置してフェイトの補足説明を行った。

「フェイトが言っていたのは、ことだま言霊という奴だ」

言霊ってなんですか？　なのはは理解不足。読書が好きなはやは、言霊の言葉は知っているがソレと魔法がなぜ結びつくのか？という表情を作る二人にクロノは説明しだす。

「言葉には。現実を形成する力がある」

たとえば「色」という言葉がある。自然界にあらかじめ「色」があるのではなく「色」という言葉があるから我々はそこに「色」を見る。

虹の色を三色で表現する文化と、五色で表現する文化と、七色で表現する文化があるのは、人間の認識能力が現実をつくるのではなく「言葉」が現実を作っていることを意味する。

「こういった構造主義的言語観は、現代の言語論の基礎になっている考え方だ。ミッドでも地球でもそれは変わらない」

クロノの説明はまだ続く。

言霊の「タマ」本来それは「核となるエッセンス」という程度の意味の言葉だと言われている。

従って「コト・タマ」とは、「モノゴトの中核を為すもの」であり「コト・ノ・ハ」とは「そのモノゴトの記号的表現」のこと。

「言葉に言霊が宿る」というのを「モノゴトの本質というのは認識によって構成されるもので、我々の認識のありようこそが現実を規定する。」

言葉とはその認識のありようの表現された形である」という意味に取るのが正しい。

「つまりだ、言葉が世界を定義するという事に言い換えられる」

もう少し噛み砕いて考えてみると、「口に出して」言葉にしたことが、「直接関係がないにもかかわらず」実生活におこってしまうことがある。

その言葉のもつ影響力や説明しがたい力のことを「言霊」といえ

る。

クロノの説明をポカーンと口を開けて聞くのはとはやて。ここまで説明しても未だなのか？ というクロノの表情を見て。いつの間にか復活したすずめが彼女たちの疑問をすんなりと解決する。

「二人ともさ、こんな経験ない？」

母親から、来客にお茶を出すように頼まれます。そのときに、お茶碗を割らないようにねと言われます。

わっちゃだめ、わっちゃだめと気をつけるのですが結局割ってしまっ
まう。

母親から言われたことによって、過度に注意が働いてしまい逆にその言葉に縛られてしまった。

「兄弟子が言いたい言霊つてのは、多分これかな？」

はやてが納得した様にポンと手を叩いた。

「あー、それが新しい魔導師のスタイルって訳やね、確かに呪文で効果出す訳じゃないから新しいスタイルやわ」

フンと緑の髪をかきあげ、優秀な妹弟子をもって幸せですね？という顔を作るすずめ。伊達にノンジャンル漫画オタクではない無駄に知識力は広い。

妹弟子のリアクションを華麗にスルーしてクロノも声をだす。

「まあ管理局では心理操作系としてカテゴライズする予定だがな」

いままであまり言葉を発しなかったなのはが、クロノに核心を突く事をいう。

「私たちが集められたのは、その新しいスタイルの魔導師に関係するって事？ クロノ君。じゃなくて艦長」

十四という年齢になったのは。上司に対する口のきき方も出来るようになってきていた。

そういう事だという肯定的な頷きをしたクロノ・ハラオウンだった。

「実際に会ってもらおう、ついてきてくれ」

なのは達、魔法少女四人は。アースラ艦長と共に第七訓練スペースに向かった。

なのは達が言霊について話している頃の第七訓練スペースには、リンディが居た。近々クロノとの結婚も噂されているエイミィも同席していた。

訓練スペースにいる少女は両手棍をもち、必死に口を動かしている。

エイミィの操るキーボードの前に出ている空間ディスプレイにはある人物の個人データが出ていた。

ゆのぎみか
萬木美加、14歳。女 魔力ランク総合B+ 使用術式 該当無

し。
清祥学園中等部2年E組。

魔法と思しきモノを使っている時の彼女の姿には迫力があった。

セミロングの藍色髪は魔法効果なのであろうか重力に逆らっており後頭部の生え際まで確認できる程逆立っている。

彼女の肩からかかる大きなアクセサリは中心部分に拳大くらいの紅玉が付けられており、その紅玉も時折身体を離れて浮く時があった。

通常魔導師ならば足元に魔法陣が現れているはずであるが彼女にはソレが無い。

その代わりに身体全体に微弱な光の幕が形成されていた。言葉を紡ぐ彼女の表情には疲れが出始めてきている。彼女の魔力を示す部分のシグナルがレッドゾーンに入っていたのを確認したリンディはエイミィに声をかける。

「あまり無理はさせられないわね、一度休憩を挟みましょう」

「そうですね、かれこれ二時間は訓練してますしね」

リンディの提案に同意するエイミィは訓練スペースにいる美加に声をかけた。

「美加ちゃん、一旦休憩いれようか？」

エイミィの一言で言葉を発することをやめた萬木美加は わかりました と返事をし訓練スペースを後にする。

出入り口から通路に出た美加は訓練の疲れがドツと押し寄せてきて立ちくらみを起こした。

「あ……」

か細い声を発してバランスを崩してよろけた。このままでは床に倒れこむ。はずだった。想像していた衝撃はなにかわりにムニツという柔らかい物が触れる触感が自分の顔に伝わる。

人の体の感触だと理解できた美加はぶつかってしまった人物に謝る。

「すみません」

「大丈夫ですか？」

倒れかけた美加を受け止めたのは高町なのは。クロノについてきてくれ といわれた第七訓練スペースは戦技教導隊のエリアであり。彼女が先に歩いて先導をしていたのだ。

偶然の形で倒れこみそうになった美加をなのはが胸で抱きとめたのだ。

「今の声は……」

彼女の問いかけを聞いた美加は聞き覚えのある声に胸にうずめた顔を持ち上げた。

なのはの顔を確認した美加。彼女の顔を確認したなのは。時空管理局という場所でクラスメートと出会う二人は同時に声を出した。

「高町さん！」

「萬木さん?!」

すでに管理局で有名になっているなのはの事を知っている美加はともかく、美加を見たなのはの驚き様はかなりのものだった。

リリカルなのはA・S・tO Strikers 未完成な少女達

第一話 言霊使い 『ワードユーザー』 END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5262p/>

リリカルなのはA's to StrikerS 未完成な少女達

2010年12月25日18時09分発行